

中学校音楽科における日本の伝統音楽の系統的学習

～ 能, 長唄, 文楽の授業実践例 ～

伊 野 義 博 ・ 相 馬 直 子

1 はじめに

本稿は、中学校における日本の伝統音楽の系統的な学習について、その基本的な考え方や枠組みを、能、長唄、文楽を教材とした事例として示すものである。

2006（平成18）年、約60年ぶりに改正された教育基本法では、「日本の伝統や文化を基盤として国際社会を生きる日本人」の育成が期待された。これを踏まえ学校教育法が改正されるとともに、2008（平成20）年には学習指導要領が改訂され、学校においては、伝統や文化に関する教育が一層重視されるようになった。このことが、音楽科における伝統音楽の重視に拍車をかけている。

これを背景に、学校の音楽授業において、日本の伝統音楽の授業実践が多く提案されるようになってきた。実際のところ、教科書においても、雅楽、長唄（歌舞伎）、能、文楽、民謡、祭り囃子、わらべうた等々、多くの伝統音楽が教材として提示されている。このうち、能、文楽（人形浄瑠璃）、歌舞伎は、日本三大芸能などとも言われ、いずれの教科書にも教材として紹介されており、教科書の指導書には、視覚的な補助資料なども含め、具体的な指導プランも示されている。

今後、教育現場においては、まずは、具体的な指導プランをさらに多く提案することが求められる。さらに、これらの教材の何を、中学校3年間の学習でどのように位置づけ、どのように学習していけば良いのか、そしてその授業の実際はどのようになるのか、といった系統性の視点からの具体的な提案も望まれる。本稿では、こうした課題に応えるべく、能、文楽、長唄を取り上げ、個々の授業実践の方法を提示するとともに、これらの学習の系統性発展性、それを裏付ける方法論と実践といった一連の枠組みを提案するものである。なお、実践は、平成24年1月から26年1月の3年間、いずれも新潟大学附属新潟中学校においてなされた。授業者は、相馬直子教諭である。

2 実践の枠組みと論理

1) 授業実践

授業は、次表のように実践された。

題材名	教材名	学年	授業者
謡のよさを味わおう	* 能「羽衣」「船弁慶」「高砂」	2年生	相馬直子
長唄のよさを味わおう	* 歌舞伎「勧進帳」 * 長唄「勧進帳」 ・ 能「安宅」	2年生	相馬直子
義太夫節のよさを味わおう	* 文楽「新版歌祭文」から『野崎村の段』 ・ 能「安宅」・歌舞伎「勧進帳」	3年生	相馬直子

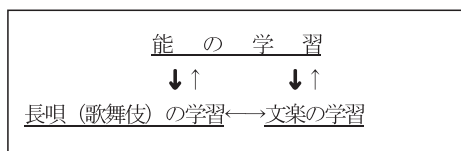
表：授業実践一覧（* 中心となる教材、・ 補助教材）

すなわち、平成24年6月にまず2年生の能の授業を、ついで平成25年1月にこの学年に対して長唄の授業を、そして平成25年6月、この学年が3年生になった時に義太夫節の授業を実施した。授業実践の関係から2年生に2題材の実施となっているが、実際は、1年生～2年生～3年生といった順序性を想定している。

2) 題材の系統性

本実践で取り上げた教材は、以下のものである。

- ・能：「羽衣」「船弁慶」「高砂」
- ・長唄（歌舞伎）：「勧進帳」
- ・文楽：「新版歌祭文」（野崎村の段）



実践で特徴的なのは、最初に能を扱うことにある。現行の教科書では、教育出版の場合、2年生に長唄「勧進帳」が、3年生に能「羽衣」と文楽「義経千本桜」が示されている。また、教育芸術社では、2年生に長唄「勧進帳」と文楽「新版歌祭文」から「野崎村の段」が、3年生に能「羽衣」が示されている。本実践のような配置をする理由の一つは歴史的なことで、能の成立が文楽や長唄より先んじていることにある。このため、歌舞伎や文楽には、能に取材した演目も多く、教材の内容や詞章、音楽の有り様に共通点を見出すことができる。また、謡の文句や言い回しがどのように変化していくのか比較の対象として学ぶこともできていく。今一つの理由は、謡が言葉、具体的には、日本語の韻律や響き、抑揚を基本としてつくられていることによる。このため、生徒の日常的な話しことばや声の響きを生かした学習が可能となる。そして、この学習をもとに、さらに旋律的な節回しや感情を吐露する表現へとつなげることが可能になってくる。実際の授業においては、能「安宅」～歌舞伎「勧進帳」～文楽「新版歌祭文」といった流れの提案があり、それぞれ具体化されている。

3) 身体性と音楽理解

3つの実践に共通するのは、実際に教材の一部を体験し、試行することを通して、音楽の特徴を理解していく方法を採用していることにある。それぞれ、ゲストティーチャーなどによる実演を見聞きし、模倣をしつつ、その演奏に近づくために試行していく。この際、指標となるのは、「身体の使い方・発声、言葉の発音、節回し」などである。モデルに近づくために「どのように身体を使っているのだろう、どのように言葉が発せられるのだろう」といった課題意識の中で、学習者自身の身体を通して試行錯誤し「わかっていく」方法である。

モデルの提示



模倣・試行

↓←思考←（身体の使い方等）

特徴理解

4) 授業構成と思考操作

実践の行われた新潟大学附属新潟中学校では、「思考の広がり深まりの中で、『学ぶ喜び』を実感・納得していく授業」をテーマに研究実践を行われ、問題解決過程における思考の広がり深まりを自覚し、「学ぶ喜び」を実感納得する授業が目指されている。その際、角屋重樹の研究¹⁾に倣い、「生徒が、状況に応じて、使えるようになっている個々の思考操作」を「思考のすべ」とし、「比較」「分類」「対比」「仮定」「類推」「帰納」「演繹」の「思考のすべ」を「比べる」「関係付ける」の2種に大別した。したがって、授業構想においては、個々の生徒がどのように「思考のすべ」を用い「比べたり」「関係づけたり」しながら思考を深化拡大していくかが重要な視点となっている。この際、他者との有効なかかわりが重要な役割を果たす²⁾。

こうしたことを反映し、3つの実践は、いずれも、①新しい音楽に触れ、興味を持つ場面、②追求の観点を見出す場面、③試行する場面、④気付きを交流する場面、⑤結論付ける場面といった構成となっている。

①新しい音楽に触れ、興味を持つ場面では、生徒の既知の経験・知識と未知の経験・知識をぶつける。すなわち、「謡のよさを味わおう」では、「合唱の世界」と「能の世界」、「長唄のよさを味わおう」では、「能 安宅」と「歌舞伎 勧進帳」、「文楽の世界を味わおう」では、「能 俊寛」、「文楽 平家女護島」が提示される。これにより、興味関心を高める。生徒は、イメージマップやワークシートを活用しつつ、気付きを整理し、課題の方向性を見定めていく。

②追求の観点を見出す場面においては、実演を鑑賞したり、実際に体験したりする。その経験をもとに、グルーピングを行い、ラベリングにより気付きや疑問を整理し、「身体の使い方、声の出し方、言葉の発音」

試行場面/題材名	謡のよさを味わおう	長唄のよさを味わおう	文楽のよさを味わおう
新しい音楽に触れ、興味を持つ場面	合唱の世界と能の世界への着目、イメージマップの作成、要素への着目	能「安宅」と歌舞伎「勧進帳」の一部を鑑賞、気付きをワークシートに記入、能の学習の振り返り	同じ演目で異なる芸能（能「俊寛」、文楽「平家女護島」）の一場面を鑑賞、比較
追求の観点を見出す場面	羽衣（弱吟）・船弁慶（強吟）の実演、体験、気付きや疑問の整理（グルーピング、ラベリング）【分類】	長唄と三味線の実演、体験、気付きや疑問の整理（グルーピング、ラベリング）【分類】	文楽の実演鑑賞、体験、気付きや疑問の整理（グルーピング、ラベリング）【分類】
試行する場面	試行（謡比べ、聴き比べ）、「身体の使い方」等の観点設定【比べる】	試行（ペア活動）、「身体の使い方」等の観点設定【比べる】	詞と情景描写の試行、「身体の使い方」等の観点設定（プロと自分たちの語りの対比【比べる】）
気付きを交流する場面	弱吟（羽衣）と強吟（船弁慶）の音楽の特徴について交流、ワークシート、【比べる】	同じ歌詞の長唄と謡のうたい比べ、気付きの記述、再度の鑑賞、【比べる】 ペア・グループ交流	ペアやグループでの試行、グループ交流、異なる芸能（能、歌舞伎、文楽）を提示【比べる】
結論付ける場面	「高砂」の謡（強吟）を鑑賞、謡のよさや魅力についての批評	歌舞伎「勧進帳」、能「安宅」のダイジェストを鑑賞、長唄のよさや魅力について批評	「野崎村の段」の最後の部分を鑑賞、文楽のよさや魅力について批評

などといった追求の観点を見出ししていく。この際、思考のすべとして「分類」を機能させる。これらの追求の観点は、「うたう時の観点（身体の使い方・発声、言葉の発音、節回し等）」「聴く時の観点（声の音色、旋律（音の高低）、速度、強弱、間等）」などのように整理される。

③試行する場面においては、特定の箇所を取り出ししながら、実際に試行していく。ここでは、前記観点をもとに、生徒自身の表現と専門家の表現を比較しつつ類似点や相違点が明らかにされる。「比べる」思考のすべを機能させる。

④気付きを交流する場面では、試行体験を通して気付いたことをペアやグループといった仲間との交流を通してまとめ、音楽の特徴を整理していく。この際、弱吟と強吟、同じ歌詞の長唄と謡、同じ場面の能と文楽の比較鑑賞が気付きの多様性を導き出し、質を深めていく。「比べる」「関係付け」思考のすべが機能する。

⑤結論づける場面では、これまでの学習を総括し、音楽の魅力をつたえるべく、学習内容と深く関連し、比較できる教材提示を試みる。すなわち「謡のよさを味わおう」では、あらたな演目として「高砂」の謡（強吟）を、「義太夫節のよさを味わおう」では、新たな演目として「野崎村の段」の最後の部分を鑑賞する。また、「長唄のよさを味わおう」では、歌舞伎「勧進帳」と能「安宅」のダイジェストを鑑賞することになる。これらの鑑賞を通して、生徒は、これまで学習したことを活用し、それぞれの音楽の特徴について批評していく。

（伊野義博）

3 授業実践例

1) 「能」の授業

- ① 題材名 謡のよさを味わおう（2年）＜表現・鑑賞＞

教材名 能「羽衣」「船弁慶」「高砂」

- ② 目標

○「羽衣」（弱吟）と「船弁慶」（強吟）の謡を表現する活動を通して、以下のことができる。

- ・ 謡にふさわしい声や言葉の特性を生かした謡い方をするために必要な発声・身体の使い方、言葉の発音、節回しの技能を身に付けること。
- ・ 謡の声の音色、旋律（声の高低）、速度、強弱、間を知覚・感受しながら、発声や言葉の特性を

生かした謡い方を工夫し、どのように謡うかについて思いや意図をもつこと。

・ 音楽のよさや魅力について、謡の特徴と物語や演出などと関連付けて述べること。

③ 本題材を学習する意義

「能」は世界無形遺産に指定されており、「文楽」や「歌舞伎」と並んで、日本三大伝統芸能の一つである。600年以上の歴史をもつ「能」は、シテ(仕手)方の歌舞を中心に、伴奏である地謡や囃子などを伴って構成された音楽劇・仮面劇である。演技を行うのがシテ方、ワキ方であり、伴奏音楽を担当するのが囃子方(笛方、小鼓方、大鼓方、太鼓方)である。鑑賞する側の想像力をかき立てる最小限の装置やお囃子、面など、我が国の伝統芸能の磨き抜かれた技が感じられる。能は、風土、文化・歴史、伝統などに根ざして存在しているだけではなく、他の芸術とかかわらせて、音楽全体の特徴を感じ取ることができる要素もある。多くの魅力を秘めた幽玄と言われる世界であり、生徒の感性を揺さぶり、より感性を豊かにすることができる。音楽科の学習を通して身に付けたことを、生涯に渡る豊かな感性としたい。そのために、本題材では、「能」の謡の表現体験をさせることで、伝統的な表現のよさを感じ取らせる。これまでの中学校音楽の指導では、西洋音楽中心の教材選択がなされていた。これでは、生徒の音楽的な価値観や音楽的な視野を広げていくことが難しい。そこで、本題材の学習を諸地域の様々な音楽について考える契機とし、機会がなかった「能」に触れさせることで、能の中にある独特な音楽の特徴を感じ取らせたり、固有の美しさに気付かせたりすることにつなげていきたい。

教材として扱う「羽衣」は、古くから各地に伝わる「羽衣伝説」を題材にした作品で、そのストーリーは生徒にもなじみがある。羽衣を返したら、舞を舞わずに帰ってしまうだろう、と言う白竜に、天人は、「いや疑いは人間にあり、天に偽りなきものを」と返す。正直者の白竜は、天人の言葉に感動し衣を返す。この場面での天人の舞は、この能の眼目である。伝わりにくい人間の悩みや苦しみ、醜いことの多い現世に対して、能(夢幻能)では死者の世界が表現され続けてきた。夢幻能では、誰かの亡霊や神、鬼、天狗といった超自然的な存在がシテとして登場する。亡霊となって、この世に現れ、語る。これが苦しいの多い現世の人々への慰めとなったのであろう。「羽衣」では霊ではなく、天人のこの「いや疑いは～」という言葉が、美しいものへのあこがれを人々に抱かせ続けている。

さらに「羽衣」は、能の要素が凝縮された曲で、キリの部分「東遊びの数々に～」は初心者でも比較的取り組みやすい。そこで、このキリの謡の一部分を取り上げる。歌唱表現に取り組ませることにより、謡のもつ情感、日本的な情緒などを感じ取らせ、イメージをより具体的に膨らませたい。能の特徴である余韻、動と静、間などにも着目させ、能の魅力に迫ることができるようにしたい。

「船弁慶」は「羽衣」同様、初心者にも鑑賞しやすく、教材として取り上げられることが多い。子役の独吟に始まる有名な「その時義経少しも騒がす～」という謡など、聴きどころがある。劇としても起伏の多い能であり、舞姫と武将という、前、後半まったく性格の異なる主人公を一人の役者が演じ分けている。前場は、前シテの静御前が別れの舞を美しく哀しく舞う場面が大きな見どころである。後場は、後シテの平知盛が義経たちに激しく襲いかかる場面が見どころになる。2年生の1学期に学ぶ子どもたちにとって、能のおもしろさが味わえて、能の見方や聴き方、魅力の発見につながる教材である。

歌舞伎「船弁慶」は、この能が基になっている。一般的な伝統音楽の授業では、歌舞伎から能への学習が多く見られるが、当校では、今後、能から歌舞伎や文楽への学習が予定されている。能は歌舞伎よりも230年ほど歴史が古く、歌舞伎の基になっている芸能である。歌舞伎ほどエンターテインメント性は高くなく、舞台の派手さもない。そんな簡素で無駄なものを削ぎ落とした能から、庶民的な総合芸術として、歌舞伎がどのように発展したのかが、実感できる流れであると考えている。

さらに、まとめの鑑賞として扱う「高砂」(強吟)は、テンポの速い部分があったり、見映えのする場面があったりする能であるため、初心者にも鑑賞しやすい。内容は、一貫して天下太平を寿ぐ祝意に満ちており、脇能の代表曲である。芝居や相撲の最終日を千秋楽というのは、この能の謡「千秋楽」に由来し、住吉に旅立つ友成の様子を謡う「高砂や」は結婚式にも謡われる小謡であることなど、生徒にとっても比較的、身近な能と言える。

当校の生徒の大半は、小学校時代から、本題材で取り扱うような我が国の伝統的な歌唱に取り組むという経験が少ない。中学校の授業においても西洋的な発声で歌うことが多く、我が国の伝統的な歌唱を

意識したことはほとんどない。そのため、謡や能についての知識も乏しく、関心もあまり高くないものと思われる。生徒には、自ら表現したいイメージをもったり、音楽の要素の働きによって醸し出される曲想を感じ取ったりすることを通して、音楽に感動する人になってほしい。さらには、音楽のよさを味わい、音楽に感動した自分の思いを表現出来る人であってほしいと願っている。そのために、音楽科の学習を通して、演奏表現のよさや音楽の特徴を感じ取りながら、習得した知識や技能を活用し、自らの表現を工夫したり、鑑賞を深めたりしていく生徒に育てたいと考えている。

④ 本題材における課題解決のプロセスと具体的な手だて

i 新しい音楽に触れ、興味をもつ場面

「今まで表現してきた音楽の世界」と「今まで表現していない音楽の世界」について、から、「合唱」(表現してきた)と「日本の伝統芸能の『能』」(表現していない)に着目させ、気付いたことをイメージマップに記述させる。生徒は、「合唱」については記述が進むが、「能」については、知識や経験がないため、2〜3個程度の気付きで記述が止まるだろう。「能についてよく分からない。具体的に知りたい」という思いをもったところで、「能」の映像のみを見せて、気付いたことや不思議に思ったことをできるだけ多く書かせる。さらに音声も聴かせる。これにより「能は合唱の発声と違うな。なぜこのような謡い方をしているのだろうか」という疑問や、「謡について探してみたい」という思いをもたせたい。この後、これまでの音楽授業では、どのように音楽の追求をしていたかを振り返るよう指示する。これにより、「要素に着目して聴くと、曲のよさや特徴を感じ取れたな」「要素に着目して表現を追求していくと、歌い方を工夫することができたな」と、生徒が答えることを期待している。「要素に着目していくと、その音楽の魅力が見えてくるかもしれない」と認識しながら、次の段階に進む。

ii 追求の観点を見いだす場面

<手だてア>

モデルとして能楽師の実演を提示する。

ここで、ゲストティーチャー(能楽師)から、「羽衣」の実演を通して、能の所作や謡の声の出し方、言葉の発音、身体の使い方などを習ったりする。実際に、謡を体験することによって、西洋音楽の声の出し方との違いを実感する。さらに、「船弁慶」の謡(強吟)の実演を鑑賞し、羽衣の謡(弱吟)との違いを感じ取ることができる。

実演鑑賞や体験時の気付きは、付せんにメモさせる。謡に関する気付きは黄色の付せんに、それ以外の気付きはピンク色の付せんに書く。「なぜ、演目や場面によって謡は違うのかな」「自分で体験してみると、作り手や能楽師の意図が感じられるのかな」という疑問をもつだろう。謡に関する気付きを整理しまとめる。このとき、生徒は、気付きの付せんを分類し、ラベリングをする。身体の使い方・発音、言葉の発音、節回し、等が挙がってくることを期待している。共通理解を図りながら、授業者の方で整理し、「謡う時の観点」と音楽の要素として提示し、次の段階に進む。

iii 試行する場面

<手だてイ>

謡い比べや聴き比べが一目で分かるワークシートを提示する。

「声の音色、旋律(声の高低)、速度、強弱、間」を感じ取らせるために、謡い比べや聴き比べが一目で分かるワークシートを提示し、「比べる」思考を促す。生徒は、「身体の使い方・発音、言葉の発音、節回し」の「謡う時の観点」を基に、弱吟と強吟の謡い方の類似点や相違点を明らかにする。

iv 気付きを交流する場面

<手だてウ>

ペアやグループで交流する活動を組織する。

謡を謡った体験を踏まえて、「声の音色、旋律(音の高低)、速度、強弱、間」を感じ取らせるために、

「比べる」思考を用いて、「身体の使い方・発声，言葉の発音，節回し」の観点を基に，「羽衣」（弱吟）と「船弁慶」（強吟）の謡を試行し，2種類の謡の音楽の特徴について交流する。ペアやグループの仲間と交流することで，謡の音楽の特徴についての考えを深める。仲間の述べた特徴について実感することができれば，ワークシートにメモしておく。これらのメモは，vのまとめの鑑賞で批評文を書く時の材料となる。

v 結論付ける場面

iv 「気付きを交流する場面」を受けて，それを基に，今まで鑑賞していない「高砂」の謡（強吟）を鑑賞し，謡のよさや魅力について自分なりにまとめる。これまでの知識や技能を活用し，音楽の用語を用いて，根拠を明らかにし，具体的に批評文にまとめることができるだろう。

⑤ 題材の構想（全5時間 本時4／5時間）

目的意識	生徒の意識	学習活動・学習内容	場面と思考	教師の支援・指導	評価の方法
謡の魅力を伝えよう	「能」の謡は今まで学んできた音楽と何が違うのかな	① 「今まで表現してきた音楽の世界」と「今まで表現していない音楽の世界」について比べる。 ○ これまでの学習を想起しながら、気付いたことをイメージマップ（ワークシート1）に記述する。 ○ 「今まで表現してきた音楽の世界」の代表として、既習曲の合唱曲と能「羽衣」の謡を聴き比べる。 ・ 今まで学んできた合唱の発声と違うな。なぜこのような謡い方をしているのだろうか。探してみたい。 ○ さらにこれまで学んできた音楽の学習を振り返るよう指示する。 ・ 要素に着目して聴いていくと、曲のよさや特徴を感じ取れたな。 ・ 要素に着目して表現を追求していくと、歌い方を工夫できたな。 ・ 要素に着目して追求していくと、その音楽の魅力が見えてくるかもしれない。 【声の違いと曲想の変化】	i	○ 今まで、どんな音楽を鑑賞したり、歌ったりしてきたかを想起させる。 ○ イメージマップ（ワークシート1）を提示する。 ○ 特に合唱と能の謡の発声の違いはどこを聴き比べよう、指示する。 ○ 謡や合唱のCD（音声）を部分的に聴かせて、声の特徴を確認していく。	関① 観察 ワークシート1
	なぜこのような謡い方なのか	② 謡の初歩的な発声、言葉の発音、身体の使い方を体験する。 ○ 実際の能楽堂で、能の所作や舞の基本型について、ゲストティーチャー（能楽師）から習い、実際に何種類かやってみる。 ○ 謡にふさわしい声の出し方、言葉の発音、身体の使い方を能楽師から習いながら謡う。 ○ 弉吟「羽衣」と強吟「船弁慶」の実演を聴く。 ・ なぜ、謡には強吟と弉吟があるのかな。 ○ 実演鑑賞や体験時の気付きは付せんにメモする。気付いた点は黄色の付せん、疑問点はピンク色の付せんに書く。 ○ 気付きの付せんを分類し、ラベリングする。（ワークシート2） ・ 身体の使い方・発声、言葉の発音、節回し、等の謡う時の観点や音楽の要素（音色、旋律、声の高低、速度、強弱、間）が見つかる。 【音楽と他芸術との関係】【伝統的な歌唱】【面や装束、舞台表現の特徴理解】	ii	○ 体験して気付いたことは、付せんにメモしておくように指示する。 ○ 能の背景となる歴史や文化、能の用語、物語の内容などについて、資料を配布し、主なところは事前におさえておく。 ○ 能楽師の実演を提示する。【手だてア】 ○ 事前に謡の歌詞カードを配布しておく。	創① 付せん ワークシート2
	実際に能楽師はどのように謡っているのかな	③ 謡う時の観点「身体の使い方・発声、言葉の発音、節回し」を基に、強吟や弉吟をどのように謡うかを創意工夫する。 ○ 強吟と弉吟を比べ、どのように謡うかをワークシート3に記述する。 ・ 「羽衣」の「東嶺の散々に〜」（弉吟）と「船弁慶」の「そのとき義経少しも騒がず〜」（強吟）を練習し、どのように謡うかを記述する。	分類 iii 比べる	○ 実演から、気付いたことをメモしておくよう促す。 ○ 共通理解を図りながら、授業者の方で整理し、謡の観点として提示する。	
	強吟と弉吟の違いが表現できるかな	④ 「羽衣」（弉吟）と「船弁慶」（強吟）の謡の特徴について述べる。 ○ 謡の特徴をワークシート4に記述する。 ○ 2つの謡の特徴について、ペアやグループの仲間と交流する。 ○ 仲間の述べた特徴について、自らも共感することができれば、その特徴をワークシート4にメモしておく。 ○ ワークシート4に2種類の謡を聴いて、感じ取ったことと、その理由をすべて述べなさい。 【伝統的な歌唱】【要素の働きと効果】	iv 比べる 比べる	指示1：謡う時の観点を基に、強吟と弉吟をどのように謡うか、ワークシート3に書きなさい。【手だてイ】 指示2：強吟と弉吟にふさわしい謡い方を追求しなさい。 指示3：謡の特徴をワークシート4に書きなさい。【手だてイ】 指示4：謡の特徴をグループで交流しなさい。【手だてウ】 指示5：それぞれの謡を聴き、感じ取ったことと、その理由をすべて述べなさい。	創① ワークシート4
	強吟と弉吟の特徴は何だろうか	⑤ 「高砂」の謡を鑑賞する。 ○ 「高砂」の謡（強吟）を鑑賞する。 ○ これまで書き込んできたイメージマップや付せんを見ながら、学習してきた知識を活用し、謡のよさや魅力を根拠を明らかにしてワークシート5にまとめる。 【伝統的な歌唱】【要素の働きと効果】【鑑賞の能力】	v	指示6：「高砂」の謡を鑑賞します、今まで謡ったり聴いたりしてきたことを踏まえて、謡のよさや魅力について、ワークシート5にまとめなさい。	鑑① ワークシート5

⑥ 評価規準

観 点	評 価 規 準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 能の音楽に関心をもち、謡を謡ったり鑑賞したりする学習に主体的に取り組もうとしている。	観 察 ワークシート1
音楽表現の創意工夫	① 能楽師の演奏を聴いたり、「羽衣」(弱吟)や「船弁慶」(強吟)の特徴に基づいた謡を試したりして、知覚・感受しながら、気付いたことを述べている。	観 察 ワークシート2, 3, 4 付せん
音楽表現の技能	① 謡の特徴を捉えた音楽表現をするために必要な、発声や基礎的な技能を身に付けている。	観 察
鑑賞の能力	① 謡の体験後に「高砂」(強吟)を鑑賞する活動を通して、能のよさや魅力を、謡の音楽の特徴と物語や演出などと関連付けて理解し、根拠を明らかにして述べている。	ワークシート5 (批評文)

⑦ 授業の実際

(ア) 本時のねらい (4/5時間)

- 「羽衣」(弱吟)と「船弁慶」(強吟)の特徴に基づいた謡を試しながら、表現を追求したり、謡の体験後に、仲間と交流したりする活動を通して、以下のことができる。

- ・ 謡から感じ取ったことと、謡い方によって変化する、音色や速度、旋律(声の高低)、強弱、間の特徴とをかわらせて述べること。

(イ) 本時で用いさせたい「思考のすべ」

比べる

(ウ) 「思考のすべ」を用いさせるための具体的な手だて

<手だてイ>

謡い比べや聴き比べが一目で分かるワークシートを提示する。

「比べる」すべを用いて、「身体を使い方・発声、言葉の発音、節回し」の「謡う時の観点」を基に、弱吟と強吟の謡い方の類似点や相違点を明らかにするために行う。

<手だてウ>

ペアやグループで交流する活動を組織する。

「比べる」すべを用いて、2種類の謡の特徴を述べるができるようにするために行う。

<<本時ダイジェスト>> 「船弁慶」(強吟)と「羽衣」(弱吟)の謡の特徴を述べる活動

<謡う時の観点>

発声・身体使い方

言葉の発音

節回し

比べる

<要素>

音色

速度

強弱

間

旋律

謡の体験後に・・・

仲間との交流後に・・・

鑑賞後に・・・

謡の特徴	船 弁 慶	羽 衣
強吟	<ul style="list-style-type: none"> ・ 声の高低があまりに高い。 ・ 声の高低があまりに低い。 ・ たたき音がよく聞こえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 声の高低が低い。 ・ 声の高低が低い。 ・ 声の高低が低い。 ・ 声の高低が低い。
弱吟	<ul style="list-style-type: none"> ・ 声の高低が低い。 ・ 声の高低が低い。 ・ 声の高低が低い。 ・ 声の高低が低い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 声の高低が低い。 ・ 声の高低が低い。 ・ 声の高低が低い。 ・ 声の高低が低い。

(エ) 本時の評価基準

- A: 強吟と弱吟における、音楽が形づくっている要素「声の音色、旋律(声の高低)、強弱、速度、間」の中から、3～5つの特徴を書き、かつ、それらと感じ取ったことをかわらせて書いている。

B： 強吟と弱吟における、音楽を形づくっている要素「声の音色、旋律（声の高低）、強弱、速度、間」の中から、1～2つの特徴を書き、かつ、それらと感じ取ったことをかかわらせて書いている。

(オ) 本時の事実

観点を基に、強吟と弱吟をどのように謡うかを創意工夫する活動（題材の構想の学習活動③）
働き掛け1として、次の指示を行った。

<指示1>

「強吟」と「弱吟」の2種類の謡について、実際に自分で声を出して、「強吟」と「弱吟」にふさわしい謡い方をペアで追求しなさい。

この働き掛けによって、生徒はペアで、謡う時の観点「発声・身体の使い方」、「言葉の発音」、「節回し」を基に、強吟と弱吟にふさわしい謡い方を追求した。生徒は、謡うことによって、それぞれの謡の特徴に気付き、実感することができた。

(カ) 「羽衣」（弱吟）と「船弁慶」（強吟）の音楽の特徴について述べる活動（題材の構想の学習活動④）
働き掛け2として、次の指示を行い、ワークシート4を提示した。

<指示2>

強吟と弱吟を謡い比べて気付いた「船弁慶」と「羽衣」のそれぞれの謡の特徴をワークシート記述しなさい。 <手だてイ>

生徒は、謡う時の観点を基に謡い方を工夫すると、要素「声の音色、強弱、速度、旋律、間」は、どのように変化したのか、気付いたことをワークシート4に記述した。

<考察> K男は、各要素に①～⑤の番号を付けて、それを観点としながら、強吟と弱吟の特徴を一つ一つ比べている姿が見られた。例えば、「声の音色」では、強吟の「船弁慶」は「力強く太い音」、弱吟の「羽衣」は、「船弁慶より少しやさしく」と記述している。また、「旋律（声の高低）」では、強吟は「低く謡う」、弱吟は「船弁慶より高く」と記述した。すべての要素を観点としながら、強吟と弱吟の類似点や相違点を見だしていた。K男のワークシートの記述から、次のように判断することができる。生徒は、謡の体験後にその気付きをまとめる活動において、「比べる」思考を発揮し、要素を観点としながら、強吟と弱吟を比べ、謡の特徴をワークシートに記述した。以上のことから、次のことが言える。手だてイのワークシートの提示によって、K男からは期待する姿が見られた。

次に、働き掛け3として、次の指示を行った。

<指示3>

「船弁慶」と「羽衣」を聴きます。それぞれの謡を聴いて、感じ取ったことと、その理由をすべて記述しなさい。

一能「船弁慶」（強吟）と「羽衣」（弱吟）を比べて					
【要素】	①	②	③	④	⑤
	声の音色	強弱	速度	旋律（声の高低）	間
謡の特徴	船 弁 慶				
	① 力強く、太い音 ② 全体的に強い ③ 最初はゆっくり、だんだん速く、 ④ 低く歌う ⑤ 句読点のあとを少し間を開ける。 羽衣より間がある。				
謡の特徴	羽 衣				
	① 船弁慶より少しやさしく ② 少し弱め ③ 全体的にゆっくりと ④ 船弁慶より高く ⑤ あまり間を開けず				
謡の特徴	羽衣より間がある。 力強い				
	やさしい 速い 声が高い				

K男は、「船弁慶」と「羽衣」のそれぞれの謡の「感じ取ったこと」と「その理由」を簡条書きで右のワークシートのように記述した。このワークシートを、評価基準に沿って詳しく見てみる。また、K男以外の生徒のワークシートも分析してみる。

船弁慶		「羽衣」	
感想	<ul style="list-style-type: none"> ・一つ一つの言葉に重みを感じた。 ・力強い雰囲気を感じた。 ・同じ気持ちで歌っていると思った。 ・怖い、激しい、強い。 	感想	<ul style="list-style-type: none"> ・一つ一つの言葉に重みを感じた。 ・様々な感情があると思った。
理由	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉をはっきりと語っている感じが、一言一言重なる感じがして、強く思っていた。 ・腹から低く、太い声を出しているように思っていた。 ・テンポ良く歌っていた。 ・声を震わせていた。 ・羽衣より、強弱が少なかった。 	理由	<ul style="list-style-type: none"> ・船弁慶とは違って言葉と言葉をつなげて歌っていたので、声を震わせていた。 ・船弁慶には「ワ」、強弱をはっきりつけていた。 ・間の数が少なかった。

【K男のワークシート4下部分】

【K男のワークシート4の分析】

船弁慶 (強吟)	評価項目	達成	記述内容
	①感じ取ったこと	○	一つ一つの言葉に重みを感じた、力強い雰囲気を感じた、同じ気持ちが続いていると思った。怖い、激しい、強い。
②理由	声の音色	○	腹から低く、太い声を出しているように思った。
	強 弱	○	羽衣より強弱が少なかった。
	速 度	○	テンポよく謡っていた。
	旋律（声の高低）	○	声を震わせていた。
	間	○	言葉をはっきりと言っていないが、一言一言を区切って謡っていた。
羽衣 (弱吟)	評価項目	達成	記述内容
	①感じ取ったこと	○	一つ一つの言葉に重みを感じた、様々な感情があると思った。
②理由	声の音色		
	強 弱	○	船弁慶と比べ、強弱をはっきりとつけていた。
	速 度		
	旋律（声の高低）	○	船弁慶とは違って言葉と言葉をつなげて謡っていた。声を震わせていた。
	間	○	間の数が少なかった。

【Y子のワークシート4の分析】

船弁慶 (強吟)	評価項目	達成	記述内容
	①感じ取ったこと	○	激しい、暗い、少し不気味、物語がある。
②理由	声の音色	○	音がずっとあまり変わらない、最初から激しい迫力がある。
	強 弱	○	声も大きくなっている。
	速 度	○	速度も少しずつ速くなっている。
	旋律（声の高低）	○	最初の義経との差（声の高さ）が大きいから。
	間	○	間がほとんどない。
羽衣 (弱吟)	評価項目	達成	記述内容
	①感じ取ったこと	○	落ち着いている。響いている感じ。激しさが無い。切れている、美しくて神聖。最後が悲しい感じ。
②理由	声の音色		一人で謡っていて、その声しか聞こえないから。
	強 弱	○	抑えがはっきりと聞こえる。
	速 度		速度が遅く、それがずっと変わっていないから。
	旋律（声の高低）	○	ウキが聞こえる。ビブラートがすごい効いているから。
	間	○	句読点が多いから。伸ばす部分が多いから。

＜考察＞

K男は、船弁慶、羽衣のそれぞれの謡を聴いて、感じ取ったことと、その理由を3～5つの謡の特徴を基に記述できたことから、評価基準のAに達することができた。また、Y子も感じ取ったことと、謡の特徴を授業者が期待したAの基準まで記述することができていた。さらに、下記の【S太ワークシート4】のように「感じ取ったこと」と要素とかかわらせた「その理由」とを具体的に矢印で結び

付けていた生徒もいた。S太は「感じ取ったこと」に対応する「理由」を、【S太のワークシート4】のように、矢印を使って、つなぎ合わせている。例えば、感じ取ったことを「緊迫感が出ている」と記述し、そのように感じ取った理由として「少しずつ速くなっていくのもそうだが、声を少しふるわせているから」とある。S太と同じように「感じ取ったこと」「その理由」が対応するように記述していた生徒は39名中8名いた。クラス全体で見ても、下記のワークシートのように記述でき、評価基準Aに達した生徒は25名、Bに達した生徒は13名であった。このように、すべての要素を記述することができた理由として、生徒が実際に強吟と弱吟を謡い比べた

	「船弁慶」	「羽衣」
感じ取ったこと	<p>ほどよく感情が入っている。 緊張感が出ている。 音を伸ばす事、エ、これに かまきっている</p>	<p>船弁慶はビバースと明るいの。 船弁慶でビバースが やからかい (やさしい)</p>
その理由	<p>音が低い所が耳に入るから 少しずつ速く、なっていくのも そうだが、声を少しふるわせて いる所がたまにいい。 「珠ささると」のささる の所を伸ばす事でよりささる ている感じが出ているから。</p>	<p>ところどころ高い音が まじっているから。 うき、が、あ、から。 アが、か、お、い、から。 (117?)</p>

【S太のワークシート4】

経験が生かされていると考える。実際に謡い比べることにより、音楽の要素を明確にとらえることにつながったのである。このことは、習得した謡について、要素を意識して実際に謡おうとする生徒の姿にも表れていた。このことから、以下のことが言える。「謡を聴き、感じ取ったことと、その理由をすべて記述する」場面において、生徒は指示3とワークシート4によって、謡を聴いて、感じ取ったことと、謡の特徴を箇条書きレベルでかかわらせて記述していた。手だてウは、「対べる」思考を発揮して、謡の特徴を考えることにつながった。なお、本時は、次時のまとめの鑑賞で、謡のよさや魅力について自分なりにまとめる批評文を書くための足掛かりであった。次時の「v 結論付ける場面」において、これまでの知識や技能を活用し、音楽の用語を用いて、根拠を明らかにし、具体的に批評文にまとめた。

2) 「長唄」の授業

- ① 題材名 長唄のよさを味わおう (2年) <表現・鑑賞>
 教材名 歌舞伎「勸進帳」(三世 並木五瓶作／四世 杵屋六三郎 作曲)
 長唄 「勸進帳」(四世 杵屋六三郎 作曲)
 能 「安宅」(観世小次郎信光 作)

② 目標

- 能の謡と長唄を鑑賞したり歌唱したりして比べる活動を通して、長唄のよさや魅力について、音楽の特徴と物語や演出などと関連付けて述べるができる。
- 「勸進帳」の長唄を体験する活動を通して、以下のことができる。
 - ・ 長唄の音色、旋律(声の高低)、強弱、リズム(間や拍)、唄と三味線とのかかわりを知覚・感受しながら、発声や言葉の特性を生かした音楽表現を工夫し、どのように合わせて唄うのかについて、思いや意図をもつこと。
 - ・ 長唄にふさわしい声や言葉の特性を捉えた唄い方をするために必要な発声・身体の使い方、言葉の発音、産字の部分の節回しや節尻の表現を生かして唄うこと。

③ 本題材を学習する意義

当校2年生の生徒は、1学期に能の学習を行っている。今回取り上げる、歌舞伎「勸進帳」は、能舞台のように、松の絵を背景とし、長唄を伴奏音楽とする松葉目物と呼ばれる演目である。特別な舞台装置を用いずに、演技が行われる。能のように、鼓の演奏から始まり、関守の富樫が番卒を引き連れて登場し名乗りを上げる。能と同様に、他の芸術とかがかわらせて、音楽全体の特徴を感じ取ることができるというよさもあるが、より音楽の要素に集中して鑑賞ができると考えている。多くの魅力を秘めた歌舞

伎の音楽の世界を堪能することができる題材であり、生徒の感性を揺さぶり、より感性を豊かにすることができる。歌舞伎「勧進帳」は、能が基になっている。一般的な伝統音楽の授業では、歌舞伎から能への学習が多く見られるが、当校では、能から歌舞伎や文楽の学習を行う。歌舞伎は能よりも230年ほど歴史が新しい芸能である。能から、庶民的な総合芸術として、歌舞伎がどのように発展したのかが、実感できる流れである。歌舞伎の伴奏音楽に用いられている三味線の伝来により、日本の音楽は、大きく変化、発展していく。生徒は、三味線が加わる前の能の音楽を学んだ後で、歌舞伎の音楽を学習する。これにより、謡から長唄、楽器の違いによる、音楽の変化を感じ取ることができる。さらに、歌舞伎が発展した背景には、三味線だけでなく、江戸時代の大衆パワーがある。絵画、読本、俳諧、演劇など、爛熟した江戸の町人文化は、音楽にあってもそれまでの宮廷、武家、寺院など一部特殊な階級社会の人たちだけで楽しむものではなく、広く大衆の支持を受けていた。そのような大衆の支持を受けるために、題材や筋書、音楽で人気のあるものは、すぐに取り入れてしまう柔軟な発想や体質が歌舞伎にはある。したがって、歌舞伎は演劇的にも、音楽的にも、単一の芸能ではなく、日本のあらゆる芸能の集大成とも言える。

今回取り上げる長唄は、歌舞伎の音楽の代表的な種目であり、歌舞伎芝居における劇場専属音楽家による、「うたいもの」音楽の代表である。日本音楽の様々な要素を含んでいるため、旋律や調子などが多用である。楽器編成も長唄だけにみられる多彩さで、見た目にも華やかである。長唄を学ぶことによって、他の音楽とのかかわりを感じ取りながら鑑賞を深めることができると考える。生徒には、長唄が歌舞伎のそれぞれの場面でどのように効果的に用いられているかを感じ取らせ、そこから、歌舞伎の音楽のよさを自分なりに解釈し、さらに音楽用語を用いて、音楽の特徴を仲間と述べ合い、歌舞伎のよさや美しさをじっくりと味わってほしい。これらのことにより、生徒の日本の伝統音楽への理解は深められていく。以上のことが、本題材を学ぶ意義である。

④ 本題材における課題解決のプロセスと具体的手だて

i 新しい音楽に触れ、興味をもつ場面

能の「安宅」と歌舞伎の「勧進帳」の一部分を鑑賞する。気付いたことをワークシートにできるだけ多く記述させる。歌舞伎については、知識や経験もないが、2～3個程度の気付きは記述できるであろう。「能は1学期に学習したが、歌舞伎についてはよく分からない。」「長唄とは何だろう。」という意識をもつ。さらに、1学期に能の学習を行った際に記述した鑑賞文を読みながら、能の学習を振り返る。「実際に能楽堂に行って、すり足で歩いたり、謡を謡ったりして、体験することによって、能のよさや魅力が感じられたな。」「体験を積み重ねていくと、何か感じられるかもしれないな。」「歌舞伎のおもしろさを体験して探ってみたい。」という思いをもちながら、次の場面に進む。ここで、「安宅」と「勧進帳」の物語や演出の違いについて、理解しておく。

ii 追求の観点を見いだす場面

<手だてア>

ゲストティーチャーの演奏から気付いた内容を付せんに書きとめる活動を組織する。

ここで、ゲストティーチャーから、長唄と三味線の実演を通して、「長唄の声の出し方、言葉の発音、身体の使い方」を習う。実際に、体験することによって、能の音楽の特徴との類似点や相違点を感じ取ることができる。実演鑑賞や体験時の気付きは、付せんにメモさせる。長唄に関する気付きは黄色の付せんに、疑問点はピンク色の付せんに書く。黄色の付せんには「のどに力を入れずに、のどを開いて唄う。」「謡より節回しが複雑で難しい。」「言葉によって強弱の変化がある。」、ピンク色の付せんには「唄と三味線の楽器はどのように合わせているのかな。」といったことが書かれるであろう。これらの付せんに書かれた、長唄や三味線に関する気付きを整理しまとめるために、「分類スキル」を用いさせる。これにより、生徒は、気付きの付せんをグルーピングし、ラベリングする。「身体の使い方・発音」「言葉の発音」「節回し」等が挙がってくることを期待している。生徒から出された意見を授業者の方で整理し、その項目を『うたう時の観点』、「音楽の要素『聴く時の観点』」として、生徒と共通理解を図った上で提示し、次の場面に進む。

iii 試行する場面

＜手だてイ＞

ペアで検討する活動を組織する。

伝統音楽を演奏するには、きちんとした型や奏法がある。その一部分を学んだり、実際にやってみたりすることにより、演奏することの難しさや、演奏の仕方の違いで表現が変化することを感じ取ることができる。漠然とではなく、より明確に感じ取らせるために、「比べる」思考を促す。演奏家（CDや映像）と自分たちの演奏について、「身体の使い方・発声、言葉の発音、節回し」といった『うたう時の観点』を基に、できるだけ本物の演奏に近づけるように、ペアやグループで試行する。うたう際に、「演奏家」と「自分たち」の演奏を比べて、気付いたことをお互いに述べ合う。

iv 気付きを交流する場面

＜手だてウ＞

同じ歌詞の長唄と謡を提示する。

長唄の基本の唄い方を試行した後で、能「安宅」と長唄「勧進帳」の同じ場面の同じ歌詞の「これやこの、往くもかえるも別れては～」の部分のうたい比べ、気付きを記述しておく。この気付きは、長唄の特徴を明らかにしていくときに役立てていく。その後、うたい比べた体験を踏まえて、再度、長唄「勧進帳」と謡曲「安宅」を鑑賞する。「音色、旋律（音の高低）、強弱、リズム（拍や間）、唄と楽器とのかかわり」といった『聴く時の観点』を基に、「比べる」思考を促す。生徒は鑑賞した後で、長唄の音楽の特徴をワークシートに記述する。その際、聴く時の観点と「身体の使い方・発声、言葉の発音、節回し」といった、『うたう時の観点』をかかわらせて記述するようにさせる。記述後、長唄「勧進帳」の音楽の特徴について、ペアやグループで交流する。ペアやグループの仲間と交流することで、長唄の音楽の特徴についての考えを広げたり深めたりする。仲間の述べた特徴について実感することができれば、ワークシートにメモしておく。これらのメモは、v「結論付ける場面」のまとめの鑑賞で批評文を書く時の材料となる。

v 結論付ける場面

「iv 気付きを交流する場面」で記述した、長唄の音楽の特徴を基に、歌舞伎「勧進帳」と能「安宅」をダイジェストで視聴し、気に入った場面から、長唄の音楽のよさや魅力について自分なりにまとめる。これまでの知識や技能を活用し、音楽の用語を用いて、根拠を明らかにし、具体的に批評文にまとめる。

⑤ 題材の構想 (全6時間 本時6/6時間)

目的意識	生徒の意識	学習活動・学習内容	場面と思考	教師の支援・指導	評価の方法
長唄の魅力を知らう	「歌舞伎」と「能」の音楽はどんなところが違うのかな	① 「能」の『安宅』と「歌舞伎」の『勧進帳』について比べる。 ○ 「能」と「歌舞伎」の音楽を聴き比べる。 ・ 気付いたことをワークシート1に記述する。 ・ どんな内容なのか。『歌舞伎』の方は喜怒哀楽が激しい感じがする。 ・ 「能」の謡と違うところもあるけど、似ているところもあるな。なぜ、同じ演目の中でもいろいろな唄い方をしているのだろう。 ・ 「能」にはなかったけど、「歌舞伎」は三味線が効いている。 ○ 1学期の「能」の学習で記述した「能のよさや魅力について」の鑑賞文を読みながら振り返る。 ・ 実際に体験することによって、「能」のよさや魅力を感じ取れたな。 【声の違いと曲想の変化】	i	○ 「能」と「歌舞伎」の違いはどんなところかを聴き比べ、ワークシート1に記述するよう指示する。 ○ 長唄のCD(音声)を部分的に聴かせて、声の特徴を確認していく。 ○ 1学期に行った「能」の学習を想起させる。鑑賞文を読み返すよう指示する。	関① 観察 ワーク シート1
	どんな話の内容や演出だろう	② 『安宅』と『勧進帳』の話の内容や演出を比べる。 ○ 『安宅』と『勧進帳』の共通する場面を鑑賞し、演出の違いや気付いたことをメモする。 ○ 「能」の『安宅』を基に作られた「歌舞伎」の『勧進帳』であることを知る。	ii	○ 『安宅』と『勧進帳』の共通する場面の映像を提示する。 ○ 気付いたことをメモするよう指示する。	
	体験してみたら長唄の音楽の特徴が分かるかな	③ 長唄を体験する。長唄の初歩的な発声、言葉の発音、身体の使い方、三味線の構え方や弾き方を体験する。 ○ ゲストティーチャーの実演を鑑賞する。 ○ 実演鑑賞や体験時の気づきは付せんにメモする。気付いた点は黄色の付せん、疑問点はピンク色の付せんに書く。 ○ ゲストティーチャーから、長唄にふさわしい声の出し方、言葉の発音、身体の使い方などを習いながら唄う。長唄の読譜の仕方を理解する。 (「これやこの、征くもかえるも別れては、～」の部分) ○ 三味線の構え方や糸の押さえ方、撥の当て方などを確認して、三味線の基礎的な奏法に取り組む。 ○ 気づきの付せんをグルーピングし、ラベリングする。(ワークシート2) ・ 身体の使い方・発声、言葉の発音、節回し、構え方、等の演奏する時の観点や音楽の要素(音色、旋律、強弱、間、テクスチャ)が見つかる。 【日本の和楽器】【伝統的な歌唱】【音楽と他芸術との関係】	分類	○ ゲストティーチャーの実演を提示する。 (手だてア) ○ 体験して気付いたことは、付せんにメモしておくように指示する。 ○ 歌舞伎の背景となる歴史や文化などについて、資料を配布し、主なところは事前におさえておく ○ 事前に長唄の歌詞カードや三味線の楽譜を配布しておく。 ○ 気づきの付せんをワークシート2に整理する。 ○ 共通理解を図りながら、授業者の方で整理し、演奏の観点として提示する。	創① 付せん
	どのようにすると演奏家に近づけるかな	④ 演奏時の観点「身体の使い方・発声、言葉の発音、節回し、構え方」を基に、演奏家に近づけるように長唄や三味線を試行する。 ○ どのように演奏すると、演奏家に近づけるかをワークシート3に記述し、試行する。 ⑤ 「これやこの、往くもかえるも別れては～」の部分について、能の謡と長唄の両方のうたい方を試行する。	iii	指示1: 演奏家に近づけるように、演奏する時の観点を基に、どのように唄ったり弾いたりするのか、ワークシート3に書きなさい。	創① ワーク シート3 技① 観察
	謡と長唄の違いは何だろう	○ 演奏する時の観点を基にべアで、謡と長唄にふさわしい演奏の仕方を追求する。 【日本の和楽器】【伝統的な歌唱】【要素の働きと効果】 ⑥ 表現体験を基に長唄を鑑賞し、音楽の特徴について述べる。 ○ 長唄を鑑賞し、長唄の特徴をワークシート4に記述する。 ○ 長唄の特徴について、べアやグループの仲間と交流する。 ○ 仲間の述べた特徴について、自らも共感することができれば、その特徴をワークシート4にメモしておく。 【伝統的な歌唱】【要素の働きと効果】 ⑦ 歌舞伎『勧進帳』を鑑賞する。	iv 比べる	指示2: 謡と長唄にふさわしい演奏の仕方を追求しなさい。 (手だてイ) 指示3: 長唄の特徴をワークシート4に書きなさい。 指示4: 長唄の特徴をグループで交流しなさい。	技① 観察 創① ワーク シート4
	長唄のよさや魅力とは何だろう	○ これまで書き込んできたワークシートや付せんを見ながら、学習してきた知識を活用し、長唄のよさや魅力について、根拠を明らかにしてワークシート5にまとめる。 【日本の和楽器】【伝統的な歌唱】【鑑賞の能力】	v	指示5: 歌舞伎『勧進帳』を鑑賞します。今まで演奏したり聴いたりしてきたことを踏まえて、長唄の音楽のよさや魅力について、ワークシート5にまとめなさい。	鑑① ワーク シート5

⑥ 評価計画

観 点	評 価 規 準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 長唄の音楽に関心を持ち、長唄を演奏したり鑑賞したりする学習に主体的に取り組もうとしている。	観 察 ワークシート1
音楽表現の創意工夫	① プロの演奏を聴いたり長唄を試したりして、知覚・感受しながら、歌舞伎の音楽の特徴について、気付いたことを述べている。	観 察 ワークシート2, 3, 4 付せん
音楽表現の技能	① 長唄の音楽の特徴を捉えた音楽表現である、音色や産字の部分の節回し、節尻の表現を意識して、唄っている。	観 察
鑑賞の能力	① 長唄や三味線の体験後に「勸進帳」を鑑賞する活動を通して、長唄の音楽のよさや魅力を、音楽の特徴と物語や演出などと関連付けて理解し、根拠を明らかにして述べている。	ワークシート5 (批評文)

3)「文楽」の授業

- ① 題材名 義太夫節のよさを味わおう (3年) <表現・鑑賞>
 教材名 文楽 「新版歌祭文」から『野崎村の段』(近松半二 作)
 能 「安 宅」(観世小次郎信光 作)
 歌舞伎「勸進帳」(三世 並木五瓶 作/四世 杵屋六三郎 作曲)

② 目 標

- 義太夫節を聴いたり語ったりする活動を通して、以下のことができる。
 - ・ 義太夫節の音色、間などのリズム、節回しや産字などの旋律、語りと三味線とのかかわりを知覚・感受し、どのように語るのかについて、思いや意図をもつこと。
 - ・ 義太夫節にふさわしい声や言葉の特性を捉えた語り方に必要な発声・身体の使い方、言葉の発音、節回しや産字の表現を生かすこと。
- 文楽と能の謡や歌舞伎の長唄とを比べて鑑賞する活動を通して、義太夫節のよさや魅力について、音楽の特徴と物語や演出などを関連付けて述べることができる。

③ 本題材を学習する意義

文楽は世界無形文化遺産に指定されており、歌舞伎や能と並んで、日本三大伝統芸能の一つである。文楽は、江戸時代に発展し、戯曲としての浄瑠璃作品という文芸面と、人形芝居という演劇面、義太夫節という音楽面の三つの要素が結合した、日本が世界に誇れる優れた芸能である。しかしながら、上演者や鑑賞に訪れる方の世代には偏りがある。特に若年層に受け入れられない要因として、言葉が分からない、話が時代に合わない、話の展開が遅いこと等が挙げられる。このような文楽の現状から、世代を超えて、多くの方が親しむようになるには、若い時から、そういった芸能に触れる機会を積極的にもたせるようにし、よさや魅力を味わえるような学習体験を積ませていくことが大切であると考え。浄瑠璃作品は、近松門左衛門らの作者が、読むための文学作品ではなく、劇場で上演するために書いたものであり、時代をこえて、人々に受け入れられている。太夫の語りと三味線によって演奏される義太夫節に、人形遣いが呼吸を合わせ、人間のさまざまなドラマを表現する。太夫・三味線・人形、この3つの役割を三業という。生徒は、細竿三味線については歌舞伎の長唄の学習の中で、鑑賞したり弾いたりしている。義太夫節では、太棹三味線を使うので、この違いも感じ取らせたい。ところで、当校3年生の生徒は、2年時に能の謡や歌舞伎の長唄の学習を行っている。このように進めることで、能から庶民的な総合芸術として、歌舞伎や文楽がどのように発展したのかを生徒が実感できるのである。また、謡や長唄といった「うたいもの」から、義太夫節といった「語りもの」へと、さらに、楽器の違いによる音楽の変化を感じ取ることができる。文楽は、人形の美しさや写実的な動きという、視覚面にまず惹きつけられる。しかしながら、次第に義太夫節の太夫の声と太棹の三味線の音色といった聴覚に訴える迫力に圧倒される。太夫は、物語に登場する人物の台詞や心の動き、場面の様子などを、通常一人で語り分ける。三味線弾きは、太夫の語りに合わせて季節や時間、人物の心の動きなどをさまざまな音色で表現

する。また、太夫との呼吸の合わせ方や間の取り方によって、太夫をリードしたり助けたりする。これらの息の合った緊密な連携により、一気に物語世界へ引き込まれていく。このようなところが、義太夫節のよさや魅力である。このように、本題材の学習を通して、多くの魅力を秘めた文楽の音楽の世界を堪能することができ、生徒の感性を揺さぶり、より豊かにすることができる。音楽のよさを味わうということは、ただ心地よいといったことにとどまることなく、その音楽の内容を価値あるものとして、自らの感性によって確認する行為のことである。このような活動を積み重ねることにより、音楽に対する感性が一層磨かれ、自分にとっての音楽の意味を見いだしていくことにつながっていくと考える。

以上のことが、本題材を学ぶ意義である。

④ 本題材における課題

鑑賞や表現したことを基に、義太夫節のよさや魅力を明らかにすること。

⑤ 本題材における課題解決の思考場面

課題解決における思考場面	生徒の思考
i 新しい音楽に触れ、興味をもつ場面	同じ日本の伝統芸能でも、能や歌舞伎の演出や音楽とは違うな。文楽は人形劇みたいでおもしろそうだな。物語を語ったり、台詞を話したりしている人の声はすごく迫力があるな、という思いをもつ。
ii 追求の観点を見出す場面	太夫は一人で語り分けていてすごいな。どうしてあのように語れるのかな。実際にやってみると、義太夫節の語りが分かるかな、という思いをもつ。
iii 試行する場面	一人で老若男女をこなすために、どのように声の音色を変えているのかな。義太夫節の語りのよさや魅力を明らかにしたい、という思いもち、太夫に近づけるようにグループで役柄を決めて語る。
iv 気づきを交流する場面	一人で語り分けたり、詞と節の違いを表現したりする。体験した後はもう一度鑑賞する。気付いたことは仲間と交流して、自分の考えを広げたり深めたりする。実際に義太夫節を語り分けたり鑑賞したりしてみても分かった特徴を述べる。
v 結論付ける場面	義太夫節のよさや魅力をまとめる。

⑥ 本題材における思考を促す手だて

<手だてア>

ゲストティーチャーの実演鑑賞や体験時の気づきを付せんに書く活動を組織する。

実演鑑賞や体験時の気づきは付せんにメモさせる。義太夫節に関する気づきは黄色の付せんに、疑問に思ったことはピンク色の付せんに書く。黄色の付せんに、「迫力があり、お腹に力を入れ、張り上げるように発声している。」といったことが書かれるであろう。実演を鑑賞し、基本的な体験をしたことにより、「分類スキル」を促し、生徒は付せんに書かれた義太夫節に関する気づきをグルーピングし、ラベリングする。ラベリングの項目には、「声の音色」「間」「節回しや産字」「語りと三味線とのかかわり」といった項目が挙がってくることを期待している。これらの生徒から出されたラベリング項目を授業者の方で、生徒の意見を聞きながら整理し、その項目を生徒と共通理解を図った上で、『追求の観点』として提示する。伝統音楽を表現するには、きちんとした型や奏法がある。その一部分を学んだり、実際にやってみたりすることにより、語ることの難しさや、語り方の違いで表現が変化することを感じ取ることができる。プロの語りに近づけるようにするために、次の手だてを講じる。

<手だてイ>①

ペアやグループで語り方を検討する活動を組織する。

これによって、「比べる」思考を促し、生徒が、語り方のコツを明確に感じ取ることができる。プロ（CDや映像）と自分たちの語りについて、「身体の使用方・発声、言葉の発音、節回し」などといった『語る時に大切なポイント』を基に、できるだけプロの義太夫節に近づけるように、グループで一人一役を決めて、詞（お染と久作、久松）と情景描写の部分を試行する。「プロ」と「自分たち」の語りを比べて、

気付いたことをお互いに述べ合う。これにより、生徒は義太夫節の基本的な語り方のコツに気付くことができる。

次に、能の謡や歌舞伎の長唄と文楽の義太夫節を再度提示する。これにより、他の芸術の音楽との違いを意識できるようにする。追求の観点「声の音色」「間」「節回しや産字」「語りと三味線とのかかわり」を基に義太夫節の特徴を追求していく。ここで、次の手だてを講じる。

<手だてイ>②

ペアやグループで語り方を検討する活動を組織する。

これによって、「比べる」思考を促す。生徒は、一人で二～三役、さらに詞と節を語り分けることにより、義太夫節の特徴に迫ることができる。プロ（CDや映像）と自分たちの語りについて、義太夫節の特徴に気付けるように試行する。この語り比べによる気付きをグループで交流する。仲間の述べた気付きについて共感することができれば、メモしておく。グループの仲間と交流することで、自分の気付きを広げたり深めたりする。この気付きは、義太夫節のよさや魅力を明らかにしていくときに役立てていき、さらに、v「結論付ける場面」のまとめの鑑賞で批評文を書く時の材料となる。

⑦ 評価計画

観 点	評 価 規 準	方 法
音楽への関心・意欲・態度	① 義太夫節の特徴と物語や演出などとの関連に関心をもち、それらを生かして語ったり聴いたりする学習に主体的に取り組もうとしている。	観 察 ワークシート1
音楽表現の創意工夫	① 義太夫節の声の音色、間、節回しや産字を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受している。 ② 知覚・感受しながら、義太夫節にふさわしい声や言葉の特性を理解して、それらを生かした音楽表現を工夫し、どのように語るかについて思いや意図をもっている。	付せん、ワークシート2 ワークシート3
音楽表現の技能	① 義太夫節にふさわしい表現をするために、発声・身体の使い方、言葉の発音、節回しを生かして語っている。	観 察
鑑賞の能力	① 義太夫節の声の音色、間、節回しや産字、語りと三味線とのかかわりを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受しながら、音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解している。義太夫節の特徴を物語や演出などに関連付けて理解し、根拠をもって批評して、義太夫節のよさを味わって聴いている。	ワークシート4

⑧ 題材の構想（全4時間 本時4／5時間）

目的意識	生徒の意識	学習活動・学習内容	場面と思考	教師の支援・指導	評価の方法
	<p>文楽は、迫力があってすごいな</p> <p>どうしてあのように語れるのかな</p> <p>実際にやってみると、義太夫節が分かるかな</p> <p>ゲストティーチャーは、どのように語っているのかな</p> <p>義太夫節を試してみよう</p>	<p>① 同じ演目である芸能（能、歌舞伎、文楽）を比べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 能や歌舞伎、文楽の一場面を鑑賞（音楽→映像）して比べ、気付いたことをワークシート1に記述する。 ・ 文楽は人形劇みたいで、おもしろそうだな。 ・ 物語を語ったり、台詞を話したりしている人の声は、迫力があってすごいな。 ○ 浄瑠璃の文章の一部を読んでみる。 ・ どこが台詞の部分だろう。読みにくいな。 ○ 太夫の語りの映像を見る。 ・ 太夫は一人で語り分けていてすごいな。どうしてあのように語れるのかな。実際にやってみると分かるかな。 【声の違いと曲想の変化】 <p>② 義太夫節の初歩的な発声、言葉の発音、身体の使い方を体験する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ゲストティーチャーの実演を鑑賞する。 ○ 実演鑑賞や体験時の気付きは付せんにメモする。気付いた点は黄色の付せん、疑問点はピンク色の付せんに書く。 ○ ゲストティーチャーから、義太夫節こふさわしい声の出し方、言葉の発音、身体の使い方などを習いながら、実際に声に出して語る。 ○ 気付きの付せんをグルーピングし、ラベリングする。（ワークシート2） ・ 身体の使い方・音遣い（発声、言葉の発音、節回し）等の「語る時に大切なポイント」や義太夫節の声の音色、節回しや淫字、間、語りと三味線とのかかわりといった「追求の観点」が見つかる。 【要素の働きと効果】 <p>③ 「語る時に大切なポイント」身体の使い方・音遣い（発声、言葉の発音、節回し）を基に、太夫に近づけるように義太夫節を試行する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ どのように語ると太夫に近づけるのかを、CDや映像を参考にしながらワークシート3に記述し、グループで一人役を決めて、台詞（お染と久作、久松）と情景描写の部分を試行する。 【要素の働きと効果】 	<p>i</p> <p>ii</p> <p>分類</p> <p>iii</p> <p>比べる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 能や歌舞伎と文楽の違いについて、音声のみで聴き比べた後に、映像を見るようにさせる。気付いたことは、ワークシート1に記述するよう指示する ○ 2年時に学習した「讀」や「長唄」の批評文を読み返すよう指示し、学習を想起させる。 ○ 浄瑠璃の文章の一部を提示する。 ○ 太夫の語りの映像を提示する。 ○ 文楽の背景となる歴史や文化などについて、資料を配布し、主なところは事前におさえておく ○ 鑑賞や体験により気付いたことは、2色の付せんにメモしておくように指示する。 （手だてア） ○ 付せんをワークシート2に整理する。 ○ 共通理解を図りながら、授業者の方で整理し、「語る時に大切なポイント」「追求の観点」として提示する。 <p>指示：太夫に近づけるように、「語る時に大切なポイント」を基に、どのように語れるのか、ワークシート3に書き、ふさわしい語り方をグループで追求しなさい。 （手だてイ）</p>	<p>関① 観察 ワークシート1</p> <p>創① 付せん ワークシート2</p> <p>創② ワークシート3 技① 観察</p> <p>技① 観察 鑑① ワークシート4</p>
	語ったり聴いたりして分かった、義太夫節の語りの特徴は何か	<p>④ 再度、異なる伝統芸能（能、歌舞伎、文楽）の音楽を聴き、義太夫節の特徴を踏まえたよさや魅力について述べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 他の芸能との違いを感じながら、謡、長唄、義太夫節の一部分を聴く。 ○ 観点を基にペアでプロの映像や音声参考にしながら、一人で語り分けられるように追求する。 ○ 表現体験をのし気付きをワークシート4に記述する。 ○ 義太夫節の特徴について、グループの仲間と交流する。仲間の述べた気付きについて、自らも共感することができれば、加筆する。 	iv 比べる	<ul style="list-style-type: none"> ○ 異なる伝統芸能の音楽を提示する。 <p>発問：義太夫節を一人で語り分けられるように、ペアで追求しなさい。 （手だてイ）</p> <p>指示：観点を基に、語ってみて気付いたこととその効果をワークシート4に記述しなさい。</p> <p>指示：記述したことをグループで交流しなさい。</p>	技① 観察 鑑① ワークシート4
	義太夫節のよさや魅力はだろう	<ul style="list-style-type: none"> ○ 文楽「新版歌祭文」から「野崎村の段」を鑑賞し、義太夫節の特徴を踏まえた、よさや魅力をワークシート4に記述する。 【鑑賞の能力】【要素の働きと効果】 	v	<p>発問：文楽「新版歌祭文」から「野崎村の段」を鑑賞します。今まで語ったり聴いたりしてきたことを踏まえて、義太夫節のよさや魅力ワークシート4にまとめなさい。</p>	

⑨ 授業の実際と考察

【義太夫節の特徴を踏まえたよさや魅力について述べる活動】

<追求の観点> 「声の音色」「間や拍」「節回しや産字」



義太夫節の試行後に、気付いたことを記述する。

仲間との交流により、気づきを補完する。

義太夫節の表現体験と鑑賞後に、よさや魅力をまとめる。

一文楽「義太夫節」

「義太夫節」とは・・・

追求の観点	① 色	② 間や拍	③ 節回しや産字
① 男・女・生・死の色を表現し、音の高さを表すことにより、セリフのイメージ、人物のイメージ、心情が伝わる。			
② 間を空けることにより、気持ちを込め入れ、リズムをつくらせることができる。			
③ 音の産字を長く、よくよくつづけることにより、声を震わせた、日本の音楽の特色が表れることが出来る。			

① 人物によって使い分けられている。

② 呼吸が伝わる。息を吐いて、むくむくする。心も伝わる。(久松が驚いて平気で)

③ 息を吐いて、というセリフの氣勢が、生々しく表現されている。

義太夫節は、一人の語り手が何人もの登場人物を演じている。その中でも男・女・生・死の色を表現し、息を吐いて、むくむくする。心も伝わる。(久松が驚いて平気で)

セリフ、リズムもつづけている。産字や節回しもつづけている。息を吐いて、むくむくする。心も伝わる。(久松が驚いて平気で)

息を吐いて、というセリフの氣勢が、生々しく表現されている。

(ア) 前時（3／5時間目）までの学習を終えた生徒の実態

- 義太夫節の初歩的な発声、言葉の発音、身体の使い方などを体験する活動（題材の構想学習活動②）によって、次のことができるようになった。
 - ・ 義太夫節の実演鑑賞や体験時の気づきを付せんにて記述し、グルーピングし、ラベリングした（ワークシート2）。これにより、「語る時に大切なポイント」や「追求の観点」を挙げること。
 - ・ 義太夫節の初歩的な声の出し方を理解し、文楽「新版歌祭文」より「野崎村の段」の一部分を口ずさむこと。

- 「追求の観点」（声の音色、間や拍、節回しや産字）を基に、太夫の語り方に近づけるように義太夫節を試行する活動（学習活動③）において、太夫の語り方に近づけるようにするために、どのように語るのかについて、思いや意図をもって、ワークシート3に記述している。

その間延しと駆け入るお染 いえお染をハナハダ

お染「逢ひたかった」

と久松に、縫いつけば、

久松「ア、コシ、声が響くござります。ガ思ひがけない

こゝへはどうして、訳を聞かして聞かして」

【K男のワークシート3の一部】

(イ) 本時のねらい

- 義太夫節を聴いたり、義太夫節の語り方を試しながら、表現を追求したりする活動を通して、義太夫節の声の音色、間や拍、節回しや産字、語りと三味線とのかかわりといった音楽的特徴と感じ取ったことをかかわらせて述べるができる。

(ウ) 本時の評価基準

A： 義太夫節「野崎村の段」における、音楽を形づくっている要素「声の音色、間や拍、節回しや産字、語りと三味線とのかかわり」の中から、3つ以上の音楽的特徴を書き、それらと感じ取ったことをかかわらせて書いている。

B： 義太夫節「野崎村の段」における、音楽を形づくっている要素「声の音色、間や拍、節回しや産字、語りと三味線とのかかわり」の中から、1～2つの音楽的特徴を書き、それらと感じ取ったことをかかわらせて書いている。

(エ) 本時授業

- (i) 異なる伝統芸能（能、歌舞伎、文楽）の音楽を聴き、義太夫節の特徴を踏まえた、よさや魅力について述べる活動（題材の構想の学習活動④）

能の謡「羽衣」、歌舞伎の長唄「勧進帳」、文楽の義太夫節「野崎村の段」の一部分を鑑賞した後、働き掛け1として、次の発問を行った。

<発問> これら（黒板に提示した「声の音色」「間や拍」「節回し」を指して）を追求の観点として、ペアで義太夫節を追求しなさい。 <手だてイ>

生徒は、ペアで、追求の観点「声の音色」「間や拍」「節回し」を観点として、下記の発話記録のように交流した。

【発話記録1】

※（ ）内、下線部は筆者加筆

u003c/p>

No.	発話者	発 話（行 動）
101	K男	（語る）「その間遅しと駆け入るお染～」
102	W和	声の調子が変わるから、そこはいいと思う。・・・で、「縫りつけばのば」と「アゝコレ」の『間』をもっと取る。それだと、めっちゃ短い。『間』を空けないと。 （プリントにメモを取る「アゝコレ」と「声が高う」の間に『間』を書く）
103	K男	（語る）「その間遅しと駆け入るお染～」
104	W和	「その間遅し」とか、『抑揚』がすごくよかった。ここの（「逢いたかった」を指して）高いところがもうちょっと高い方が・・・。差を付けたギャップあった方がいいかな。
105	K男	（タブレットでプロの演奏などの映像を確認する）
106	K男,W和	「ガ」って言わないよ。
107	W和	（「ガ」って）言ってるって、ないってこと？何でこだけカタカナなん？
108	K男	逆説の「ガ」で、「しかし」って意味あるでしょ？
109	W和	「訳を聞かして聞かして」の2回目がより完璧で。ねっ、聞いてる？
110	K男	（小文字1文字をハッキリ区切る）とワークシート3に書き込む。）

<考察>

K男とW和のペアは「声の音色」、「間や拍」、「節回し」を観点として、義太夫節の語り方について追求していた。K男ペアは、発話記録102と105から分かるように、互いの語りについて助言した後、タブレットを見て（発話記録106）、プロと自分たちの語り方を比べる姿（発話記録107～110）があった。このように、義太夫節の語り方の特徴に迫るために、互いに語り、追求の観点である「間」や「抑揚（節回し）」を基に、今まで聴いてきたプロの語り方のイメージと比べながら、その違いをアドバイスし合った。その後、さらにタブレットに映し出される太夫の映像を視聴しながら、自分たちの語りと比べ、その違いをアドバイスとして述べ合った。このことから、ペアで追求することに加えて、タブレットによる効果が大きかったと考えられる。以上のことから、次のことが言える。授業者が講じた手だてイにより、生徒は「比べる」すべを用いて、プロの太夫と自分たちの語りとを比べながら、義太夫節の音楽的特徴に気付くことにつながった。

- (ii) 義太夫節の特徴について、ペアやグループの仲間と交流する活動（題材の構想の学習活動④）
働き掛け2として、次の指示を行い、ワークシート4を提示した。

<指示>

観点を基に、語ってみて気付いたこととその効果をワークシート4に記述しなさい。

生徒は、義太夫節の追求の観点を基に語り方を試し、気付いたことをワークシート4に記述した。

【K男のワークシート4—I】
—音楽「義太夫節」—

「義太夫節」とは・・・

追求の観点	音 色 ①	間や拍 ②	節回しや産字 ③
①	男声と女声との声色を交えた、音の高さを変えることによって、セリフのイメージや、人物のイメージ、心情を伝えられる。		
②		間を入れることによって、気持ちを伝えたり、リズムをつくらせることができる。	
③			音の産字を長く、よくよくつけることによって声を震わせたり、日本の音楽の特徴を出すことができる。

働き掛け3として、次の指示を行った。

<指示>
ワークシートに記述したことをグループで交流しなさい。

生徒は、(2)で記述したワークシート4を基に、下記の発話記録のように交流した。

<発話記録2>

※ () 内、下線部は筆者加筆

No.	発話者	発 話 (行 動)
201	C夫	①「間や拍」はね、それをやったことによって、その後に出てくる言葉を強調する。で、②「産字」は余韻を残す。
202	D也	えっと。これはどちらかと言うと「節回し」に入ると思うんですけど、ちょっと口を大きめに開けることによって、大きい声を出したり、後は高い声を出したりすることができるのと、あと ③「間」を短く取ると、臨場感が出る。
203	K男	④「産字」を使うと、その言葉を強調することができると思いました。僕は、⑤「音色」は、男声と女声の音色を変えたり、声の高さを変えることによって、セリフのイメージや人物のイメージ、心情を伝えられる、と思いました。⑥「間や拍」は、間を入れることによって、気持ちを入れかえたり、リズムをつくらせたりすることができる。・・・で、⑦「節回しや産字」は、産字を長く、抑揚をつけることによって、声を震わせたり、日本の音楽の特徴を出すことができると思いました。
204	W和	えーっと、⑧「継り付けば」と「あゝコレ」の「間」がないことで、(お染が) 継りついた後に、すぐに(久松に) 言ったことを表している。それによって、緊張感が生まれると思います。で、⑨「産字」について、「継り付けば」の「いー」が長いところがあって、継り付いていく様子、長い時間を表しているのになって、思いました。

【K男のワークシート4—II交流
により気付いたことの記述】

音色	① 人物によって使い分けられている。
間や拍	② 臨場感が生まれる。息を吸い込むことができる。心情を表す。(久松が驚いた早口)
産字	③ 継り付けば、というセリフの気持ちや効果的に表現できる。余韻を残せる。

<考察>

K男グループでは、仲間が述べた義太夫節の特徴を補完し合う際に、授業者が期待する姿が表れた。K男グループの発話記録の下線部①から⑨を見てみると分かるように、表現体験により気付いた義太夫節の特徴を、一人一人が観点ごとに述べている。その後、仲間の気付きを聞いて、「確かにそうだな」と思うものだけを、選択し、まとめたものが、上記の【ワークシート4—II】の記述である。

「間や拍」については、<発話記録>下線①、③、⑧の記述から、K男は「臨場感が生まれる。

心情を表す。(久松が驚いて早口に)」とした。K男が交流する前に記述した【ワークシート4-I】では、「間」を取ることによって、「気持ちを入れかえたり、リズムをつくったり」としていた。交流により、「臨場感や心情の変化」に気付き、補完することができた姿であることが伺える。また、「産字」については、下線②、④、⑨の記述から、「縫りつけば、という気持ちを効果的に表現できる。余いんを残せる。」とした。交流前は【ワークシート4-I】のように、「産字を長く、よくよう（抑揚）をつけることによって声を震わせたり、日本の音楽の特徴を出すことが出来る。」と記述していた。この段階では、「産字を長く」「声を震わせたり」といった、義太夫節の音楽的特徴には触れているが、そこから感じ取ったことや効果については、「日本の音楽の特徴を出すことが出来る」に止まり、知覚したことしか書かれていないと判断できる。それが、上記の【ワークシート4-II】下線③にあるように、交流により、具体的な歌詞の産字部分を挙げて、役柄の気持ちの変化に触れている。これらのK男の記述は、自分では気付かなかった、義太夫節の音楽的特徴とそこから感じ取ったことを、仲間との交流により、補完している姿であると考えられる。以上のことから、義太夫節の表現体験をグループで交流する手だてでは、K男にとって、ねらいの達成に向けて有効に働いたと言える。

- (iii) 異なる伝統芸能（能、歌舞伎、文楽）の音楽を聴き、義太夫節の特徴を踏まえた、よさや魅力について述べる活動（題材の構想の学習活動④）

働き掛け4として、次の指示を行った。

<指示>

「野崎村の段」の最後の部分を鑑賞します。今まで語ったり鑑賞したりしてきたことを踏まえて、義太夫節のよさや魅力をワークシートにまとめなさい。

授業者は、鑑賞後に追加の指示として、今までの観点にもう一つ、観点「語り和三味線のとのかわり」を加えるように指示した。この指示の後、K男は、右の【ワークシート4-III】のように、義太夫節の音楽的特徴を根拠として挙げながら、そこから感じ取ったことをかかわらせて記述した。

義太夫節は一人の語りが何人もの登場人物を演じていて、その中でも男性と女性、悲しいのか、怒っているのかという表現をしているところが魅力だと感じた。また、語りによって三味線がその世界観をつくつ、リズムも作っていると思う。産字や節回しをすることで、普通に話すととはまた違う、何かわきまをさせることができて、その点がとても特徴的になっていると思う。音楽という観点で見ても西洋の音楽とは違う、独特の雰囲気があると思う。

【K男のワークシート4-III】

<考察>

K男は、「野崎村の段」の最後の部分を聴いて、「声の音色、間や拍、節回し（声の高低、強弱、声の伸ばし方）や産字、語り和三味線のとのかわり」の中から、3つ以上の音楽的特徴を挙げ、それらと感じ取ったことをかかわらせて記述できたことから、評価基準のAに達することができた。さらに、クラス全体で見ると、上記のK男のように記述でき、評価基準Aに達した生徒は39名中20名、基準Bに達した生徒は17名であった。このように、音楽を形づくっている要素と感じ取ったことをかかわらせて記述することができた理由として、生徒が難しいながらも、実際に義太夫節に挑戦し語ってみて、太夫と自分たちの語りを比べた経験が生かされていたと考えられる。実際に自分で語り比べることにより、音楽の要素を明確にとらえることにつながったのである。以上のことから、次のように結論付ける。

義太夫節を聴いたり、自分で語り比べたりすることにより、本時のねらいを達成し、「課題解決」を図ることができた生徒は20名であった。

生徒は「声の音色」「間」「節回しや産字」「語り和三味線のとのかわり」という追求の観点を基に、

「比べる」思考を発揮した。これにより、義太夫節の特徴を追求していくことができた。

＜成果＞

義太夫節を工夫し試行する場面で、「比べる」といった思考法により、太夫と自分たちとの語りを比べ、義太夫節の特徴をつかむことができた。ペアやグループで、仲間とかかわり合う中で、義太夫節の気づきを広げたり、深めたりすることができた。

＜題材後の振り返り＞

題材の終末で、「文楽『義太夫節』」の題材全体を振り返る活動を行った。

「これまでの学習で学んだこと」

【K男の振り返りシートの記述より】

○ 体験や鑑賞を通してわかった「義太夫節のよさや魅力」について

能、歌舞伎、文楽という3つの芸能の音楽は似ていると思ったが、実際に体験してみると、それぞれ異なることが分かった。義太夫節は、他の2つに比べて、語りかける感じだった。また、声の音色や高さ、強弱が、役柄によって様々に変わっていく点が、この魅力だと思った。

○ 思考にかかわること

タブレットを使うと、実際の映像と音声のどちらも好きなように、繰り返し聞くことができた。また、①自分や友達の声とプロとを対比することで、改善点などを見付けることができた。

○ その他（ペアやグループでの仲間とかかわり・感想など）

皆で、義太夫節の特徴を交流して、様々な意見を聞くことができて良かった。また、②相手にアドバイスをもらったことで、自分の語りを振り返ることや、新たな発見をすることができた。

K男の振り返りから、義太夫節を試行する場面では、太夫と自分たちとの語りを比べた。これにより、太夫との違いを何度も見たり聴いたりすることで、改善点や新たな気づきを見付けることができた（下線①，②），義太夫節の特徴をつかんでいくことにつながっていったと考えられる。また、ペアやグループで仲間とかかわり合う中で、自分の気づきを広げたり深めたりしたことが読み取れる。

（相馬直子）

4 おわりに～要素と音楽認識～

日本の伝統音楽を学校の音楽授業で扱うには、様々な課題があるが、ここでは、対象となる音楽をどのように理解していくか、そのために学習者が持っている音楽認識の方法や学習指導要領で示される共通事項における「音楽を形づくっている要素」をどう捉え用いていけばよいのかといった点に焦点化し考察したい。

1) 共通事項の考え方

授業で整理された「声の音色、旋律（音の高低）、速度、強弱、間」は、それまでの生徒の音楽学習がもとになっている。特に「音色、旋律、速度、強弱」は、共通事項の音楽を形づくっている要素として示されているものだが、これらが浮かび上がってきた背景には、こうした要素によって音楽を捉えていくといった認識法が存在する。しかし、世界のすべての音楽を学習者の既知の理解の仕方では捉えられることは難しい。音楽の見方や感じ方、価値観は、文化や様式によって異なるからである。重要なのは、ある音楽に対峙する際、「自分とは違った音楽の見方があるかもしれない」といったこと、すなわち自分自身の音楽に対する固定化したバイアス（先入観、偏見）の存在の可能性を常に意識することである。その音楽の当事者の側に立った理解の仕方がどのようなものであるのかに心を配り、その結果を様式による音楽用語を頼りに、一般的な音楽用語（西洋音楽に通じる用語、共通事項の要素名など）も用いて語っていくことが求められる。必要なのは、自分の認識を塗り替えていく作業である。そのようにしてはじめて、共通事項に示された用語が生きてくるし、世界の多様な音楽の理解ももたらされる。音楽を形づくっている要素名は、音楽の見方や認識の仕方を規定するものではなく、構造や概念などを解釈、理解し、語るための用語の例と考えることが妥当である。

2) 共通事項と文化理解

「音色に強弱が入っている。」

これは、本稿で提示した授業実践「長唄のよさを味わおう」で「勸進帳」を学習した際の生徒の発言である。この「音色に強弱が入っている」という言い方をどう受け止めるべきだろう。

- ・この生徒は「音色」と「強弱」の区別ができていない。
- ・「音色」に「強弱」が「入っている」なんて言い方は間違っている。
- ・「音色」と「強弱」といった別々な視点から音楽を捉えるように指導しなくてはならない。

確かに共通事項は、「音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱～」といった要素を取り上げ、音楽を分析的・構造的に把握する力を養おうとしている。具体的には、ポイントとなるいくつかの要素例えば「音色」「強弱」に焦点を当て、それぞれの窓口から音楽を覗いていく。実際音楽科の授業におけるワークシートの多くはそうになっている³⁾。したがって「音色に強弱」が「入り込む」などといった発想は起こりにくい。しかし、それで長唄の音の世界をとらえたことになるのだろうか。

たとえば、太鼓のドンドコドンを考えてみた場合、これを要素別に捉えるならば、音色では、ドン・ド・コ・ドン、強弱では、強（ドン）・強（ド）・弱（コ）・強（ドン）となることはなる。もちろんこうした分析も有効ではあろう。しかし、肝心なのは、日本では、伝統的にドンはドンとして丸ごと把握されてきたことにある。ちなみに和太鼓を前にして、「ドンドコドンと叩いてみましょう」と言われたとしたら、少なくとも日本語を母語としている人は、どのように打ったら良いかたちどころに理解するだろう。この事実をあえて要素の用語を用いて示すならば「音色の中に強弱が入っている」といった言い回しも生まれてくる。まさに的を射た表現で、日本人の音楽認識の仕方を言い当てている。だとすると、これを実践レベルで考えるならば、ワークシートの知覚・感受の欄を「音色」「強弱」といったように別々の枠組で設定するのは、必ずしも有効とは言えなくなる。

3) バイアスの自覚と方法論

自分自身の音楽認識の仕方により、多様な音楽を聴こうとする際の困惑や齟齬そこから生ずる問題は、すでに何度も指摘されている。

ヨーロッパの音楽家がアフリカの笛を真似して吹き、やっと音程が正しいところまで進んだら、アフリカの人が、音高の異なる別な笛を吹いて、前と同じ旋律だといったというのである。ヨーロッパの音楽家の最大の関心事は、音高であったが、アフリカの人の場合は、音色だったというのである。つまり、二人は同じ音を聴いていながら、まったく別な音楽システムでそれを捉えていた、というわけである⁴⁾。

かつて高野山の古老から聞いた話である。

「小僧の頃、師匠が声明を引いて、このとおりやってみろと言う。自分はそっくり真似をした。すると師匠は、うたってはいけないと言ってやりなおしをさせる。またそっくり真似をするから叱られる。～略～今、自分はようやくうたってはいけない、という意味が解った。あのとき、師匠が引いた声明は、音の高低ではなく、息の強弱であった。息の強弱は必然的に音の高低にもなるから、音の高低、すなわち旋律は副産物であって、主役は息の強弱であったのだ」⁵⁾。

したがって、新しい音楽に対峙する際、我々は自信のもつバイアスに自覚的になる必要がある。異なる音楽様式への対峙に際して、谷正人は「私たちに必要なのは、…中略…ある言語で異なる音楽様式を認識・表現しようとするときに避けて通れない『齟齬』の存在を積極的に語り、伝えるというスタンスなのである」⁶⁾と指摘する。

まずは文化の認識法や音楽の様式に謙虚になることが肝要である。その際、様式に使用される用語の使用と概念理解も有効な手段となる。また、最初から要素に分解するのではなく、目の前の音響をそのまま受け止め自己の身体を通して模倣する経験が不可欠だろう。先の生徒の発言は、そうした経験から生まれている。

(伊野義博)

注

- 1) 角屋重樹『なぜ、理科を教えるのか』2013 文溪堂
- 2) 「研究紀要第56集 思考の広がり深まりの中で、『学ぶ喜び』を実感・納得していく授業（1年次）」2013 新潟大学教育学部附属新潟中学校
- 3) 「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料 中学校 音楽」2010 文部科学省 国立教育政策研究所教育課程センター 教育出版 p.44 p.64など
- 4) 徳丸吉彦「訳者解説」J.ブラッキング著 徳丸吉彦訳『人間の音楽性』1978年 岩波書店 pp.210-211
- 5) 木戸敏郎「返音の魅力，合殺」『日本の音 声の音楽1』日本伝統音楽芸能研究会 音楽之友社 pp.77-78
- 6) 谷正人「イラン音楽のリズム」『音楽教育学』日本音楽教育学会 vol.40 no.2 2010 p.70